

# 第二次世界大戦末期ドイツの 外国人労務動員政策 1944/45

中 村 一 浩

## 第二次世界大戦末期ドイツの 外国人労務動員政策1944/45

中 村 一 浩

Kazuhiro Nakamura

### 目次

- 一、敗戦へと追いつめられるドイツの窮状
- 二、人的資源枯渇の隘路と強制労働
- 三、外国人労働者の国籍別背景
- 四、外国人労働者の一般的状況
- 五、むすび

### [Kurzfassung]

#### Der NS-Einsatz für Fremdarbeiter bis 1944/45

Schon im ersten Halbjahr 1944 nahm der Luftkrieg gegen die Städte und Kriegswirtschaft neue Dimensionen an. Juni 1944 fand die Landung alliierter Truppen an der Normandieküste statt. Noch dazu begann die sowjetische Truppen mit der Großoffensive an der Ostfront. Mit dem enormen persönlichen Verlust drohte Arbeitskräftemangel unlösbar zu werden.

In August 1944 waren im Gebiet des Großdeutschen Reiches 7,615,970 ausländische Arbeiter als beschäftigt gemeldet. Davon waren 1,9 Millionen Kriegsgefangene und 5,7 Millionen zivile Arbeiter. Darin schloß sich Belgier, Franzosen, Italiener, Polen, Sowjets, und viele andere ein. Für die Behandlung von Fremdarbeiter ideologische und rassistische Faktoren waren ausschlaggebend. Vor allem erfuhren Juden und Arbeiter aus Sowjetunion und noch italienische Kriegsgefangene die schlechteste Behandlung.

### 一、敗戦へと追いつめられるドイツの窮状

連合軍のシチリア島上陸の報に接し、満を持して発起した乾坤一擲の最後の対ソ反攻作戦（「城塞作戦（Operation Zitadelle）」）の完遂を1943年7月13日に呆気なく断念したヒトラーには、その後軍の退勢のみが待ち構えていた。翌年7月20日に東プロイセンのラストエンブルクに置かれた大本営での作戦会議中のヒトラー爆殺を起点としたクーデタ計画を頓挫させたものの、既に同年6月には西部戦線（6月6日ノルマンディー上陸作戦開始）と東部戦線（6月10日ソ連軍夏季攻勢＝バグラチオン作戦開始）の二正面でかつてない難局に直面していたのである。他方米英空軍機によるドイツ本土空襲は熾烈さを増し、軍需生産拠点と都市インフラの破壊、更には国民の厭戦気分助長を深刻化させつつあった。

キーワード：強制労働, 外国人労働者, 捕虜, 民間人労働者

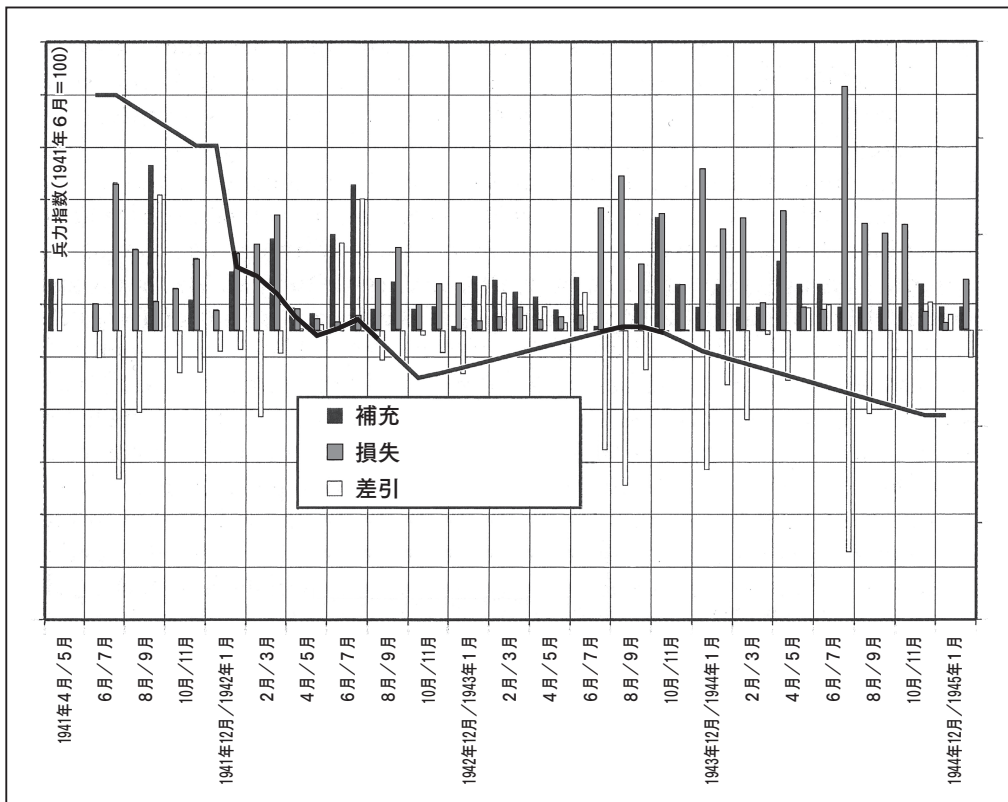
Stichwörter：Zwangsarbeit, Fremdarbeiter, Kriegsgefangene, Zivilarbeiter

表1 ドイツの労働力及び兵力の推移1939-44

5月末 現在	民 間 人 労 働 力				国 防 軍					ドイツ人
	ドイツ人			外国人						
	男子	女子	合計	外国人及び捕虜	招集兵	損失累計	現役兵力	登録人口	就業人口	労働力人口
1939	24.5	14.6	39.1	0.3	1.4	—	1.4	40.5	39.4	40.8
1940	20.4	14.4	34.8	1.2	5.7	0.1	5.6	40.5	36.0	41.6
1941	19.0	14.1	33.1	3.0	7.4	0.2	7.2	40.5	36.1	43.3
1942	16.9	14.4	31.3	4.2	9.4	0.8	8.6	40.7	35.5	44.1
1943	15.5	14.8	30.3	6.3	11.2	1.7	9.5	41.5	36.6	46.1
1944	14.2	14.8	29.0	7.1	12.4	3.3	9.1	41.4	36.1	45.2
1944. 9. 30	13.5	14.9	28.4	7.5	13.0	3.9	9.1	41.4	35.9	45.0

出所 K.-Joseph Hummel,Deutsche Geschichte 1933-1945,München 1998,S.326.

図1 兵員の損失と補充 1941-5



出所 C.Rass, Das Sozialprofil von Kampfverbänden des deutschen Heeres 1939 bis 1945. In: Militärgeschichtliches Forschungsamt(Hrsg.), Das deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg, Bd. 9/1, München 2004, S. 674. 兵力の推移 (指数) は独ソ開戦時 (1941年6月) を100としたもの。

## 二、人的資源枯渇の隘路と強制労働

兵員の喪失は、西部戦線及び東部戦線に於ける連合国側の大攻勢を受けて1944年夏季に著しく増加しており、兵員補充もままならないことが図1に明白に読み取れる。すなわちドイツの人的資源は既に枯渇していたのである。

## 三、外国人労働者の出身国別背景

ところで、ドイツ国内で就労させられた外国人労働者の出身国は多様であり、母国のドイツとの関係も多様であった<sup>1</sup>。そのような外国人労働者の背景をなす諸事情は彼らに対する処遇の好悪に直結することとなったので、些か背景を振り返っておく必要がある。

### 1. ポーランド

ポーランドは、1939年9月にドイツに軍事占領された後に、独ソ不可侵条約の秘密議定書に基づき同国に東方より侵攻したソ連によって東部を占領された。しかし、1941年6月22日に独ソ戦の火蓋が切られると、ソ連占領地域もドイツにより占領されてしまうこととなった。従って、ポーランド人は欧州で最長期間にわたってドイツの支配下に置かれたのである。その後独ソ戦末期に至り反攻するソ連軍による「解放」を期待した在英国の亡命政権主導のポーランド国民軍の武装蜂起が「ワルシャワ蜂起」（1944年8月1日～10月2日）である。この蜂起は、子飼いの共産主義者によるポーランド統治（後に「ルブリン政権」として具体化することとなった）を目論んでいたソ連による故意の進撃停止によって見殺しにされてしまう。この反乱を鎮圧したドイツは、多数の反乱関係者を処刑し、ワルシャワから多数の市民を追放した。約2,000～3,000人の女子を含む約17,000人の捕虜がドイツ軍に抑留された<sup>2</sup>とされる。但し、女性兵士の処遇には（ドイツへの敵愾心が強いだけに）苦慮したことが記録されている<sup>3</sup>。

### 2. デンマーク及びノルウェー

既に1941年6月の時点でヒトラーの承認のもと、イタリア、スペイン、クロアチアなどのイデオロギー的に同盟関係にある諸国及びゲルマン系諸国からの志願者によって構成される外国人部隊の編成が計画され、その実務は親衛隊に委ねられることとなった。しかし、全国指導者のヒムラーは、当初ゲルマン系兵士によって構成される部隊の編制にしか関心を示さなかったので、国防軍、親衛隊、外務省の代表者達による会議で、デンマーク人、ノルウェー人、スウェーデン人、オランダ人、フラマン人を武装親衛隊（Waffen SS）に配属し、フランス人、イタリア人、

<sup>1</sup> ドイツ帝国（第二帝政）まで遡った過去の経緯については、U.Herbert, Fremdarbeiter. Politik und Praxis des „Ausländer-Einsatzes“ in der Kriegswirtschaft des Dritten Reiches, Neuauflage, Bonn 1999, II. und III. Kapitel; M.Spoerer, Zwangsarbeit unter dem Hakenkreuz, Stuttgart/München 2001 などの研究がある。

<sup>2</sup> R.Overmans, Die Kriegsgefangenenpolitik des Deutschen Reiches. In: Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg, Bd. 9/2, München 2005, S. 753.

<sup>3</sup> Ebenda.

クロアチア人は国防軍に配属されることとなった<sup>4</sup>。

デンマークは1940年4月9日に無抵抗で降伏しドイツの占領を受け入れたが、ノルウェーは英仏両軍と共に2か月にわたって(4月7日～6月9日)粘り強く抗戦し、ドイツ海軍に少なからぬ損害を与えて英国本土上陸作戦断念の因をなした。このような事情を背景として、当初デンマーク人に対する処遇は寛大なものであったが、ドイツにとって戦局が悪化し始めると、ストライキやサボタージュが発生するようになり、1943年8月29日付でこの特別待遇は撤回されたのであった<sup>5</sup>。

### 3. フランス

1940年5月10日ドイツ軍がベルギー、オランダ経由でフランスを攻略せんとする「黄色作戦(Fall Gelb)」を発起すると、5月14日たちまちオランダ軍は降伏、2週間後の5月28日ベルギー軍も降伏。残った英仏軍33万8,000人(うち11万人はフランス兵)は、5月26日から6月4日にかけてドーヴァー海峡に面したダンケルクから対岸の英国本土へと脱出、更に6月19日迄に南方の海岸より凡そ32万人の連合軍兵士も英国本土への脱出に成功した。かかる推移の中でフランス軍は戦意を失い、6月14日に首都パリが陥落。同月25日を以て戦闘は終結したのであった。

1943年1月労働配置総監(Generaibevollmachtigung fur Arbeitseinsatz=GBA)フリッツ・ザウケル(Fritz Sauckel)は、フランス政府(ヴィシー政府)宛に25万人の労働力をドイツに移送するよう要請し、首相ピエール・ラヴァル(Pierre Laval)との間でフランス人捕虜を民間人待遇で就労させる協定が締結された<sup>6</sup>。結局約22万人の「民間人労働者」がドイツ国内に(半ば強制的に)移送され、ヴィシー政府崩壊に至るまでフランス人労働力の徴募業務は続いた。しかし、スカピーニを長とする在独就労者監督を目的とするヴィシー政府使節団は、1944年秋にその役割を終えた<sup>7</sup>。

### 4. オランダ

オランダは1940年5月14日から1945年5月5日(オランダ解放記念日)迄の約5年間ドイツ占領下にあったが、当初オランダ兵達にはヒトラーの意向により寛大な処遇が施された。すなわちドイツに対して将来一切敵対的な行動をとらないことを宣誓することを条件として、職業軍人た

<sup>4</sup> G.H. ステイン(吉本貴美子 訳, 吉本隆昭 監修),『武装 SS 興亡史(G.Stein, The Waffen SS, Hitler's Elite Guard at War 1939-45, New York, 1966)』, 学習研究社 2005年, 209-210頁。同書は、武装 SS 及び国防軍という軍内部の実情を検証したものであるが、本稿の主たる関心領域である外国人労働力の処遇についても、(ドイツ人の他民族に対する観念などの面で)多くの示唆を与えるものである。

<sup>5</sup> デンマーク人たる軍人達は、軍務(水兵はドイツ海軍の補助業務を担っていたし、陸軍兵士について将校団が温存され、後に対ソ戦の補助戦力として投入する計画すらあったという)を解かれ捕虜として抑留された。若干名の国外脱出者はスウェーデンや英国に逃れた。後に英国軍に参加したのは1,000人ほどであったという(Overmans,a.a.O., S.758)。

<sup>6</sup> Ebenda, S. 767.

<sup>7</sup> Ebenda, S. 768. ジョルジュ・スカピーニ(Georges Scapini, 1893-1976)は、第一次世界大戦に従軍し1915年に失明したが、その後盲人となりながらも弁護士及び政治家として活躍した。ドイツの敗戦後1952年に至り、彼は、対独協力の廉で軍事法廷に起訴されたが、無罪となった。

る捕虜達も釈放された<sup>8</sup>のである。当初西欧系外国人労働者は「出稼ぎ労働者 (Gastarbeiter)」として (高い賃金水準などの) 厚遇に浴していたとされる。しかし、徐々にドイツにとっての戦局の悪化に由来する労働力の逼迫の反映として外国人労働者に対する需要が高まってゆくと、これら西欧諸国ではドイツ国内への就労意欲が目に見えて減退し、1942年頃からドイツ国内への外国人労働力の移送 (志願就労から強制就労への転換) が進められてゆくことになる<sup>9</sup>。その後 OKW は、オランダ人将校を「民間人」資格でドイツへ移送することとし、約2,050人が (後に外務省の働きかけにより「捕虜」として処遇され、) ドイツ国内で就労した。1942年7月に健康上の理由などで帰国を許されたのは僅か160人だったという。また、1943年4月29日付クリスティアンセン空軍大將<sup>10</sup>の命令により約30万人の元捕虜が登録され、うち18~20万人がドイツへと移送された<sup>11</sup>。うち長期にわたってドイツ国内の捕虜収容所で抑留されたのは約13,000人、死亡率はフランス人とほぼ同じ2~3% (89人) だったとされている<sup>12</sup>。

## 5. ベルギー

自前の軍を持たないルクセンブルク大公国のみならず、オランダも瞬く間に降伏したのに続き、ベルギーもドイツ軍の西方「電撃戦」発起からわずか2週間余で降伏し、更に2週間余のうちにパリの陥落の時を迎える。ベルギーは、同国北部に居住するゲルマン系フラマン人と南部に居住するケルト系ワロン人により構成される複合民族国家である。ヒトラーは、前者の民族的親近性に着目し、親ドイツ陣営に獲得したいと望んでいた。かくしてフラマン人捕虜は優遇された。ドイツにより併合されたユーペン、マルメディ、モレネ出身者は、6月5日付布告で釈放された。後にベルギー・北部フランス占領軍司令官フォン・ファルケンハウゼン<sup>13</sup>は、ワロン人に対する差別を撤廃した。他方、ゲーリングは労働力不足を理由にベルギー人捕虜のドイツ移送を要求し、225,000人 (うちフラマン人145,000人、ワロン人80,000人) が移送された。1941年3月の時点でベルギー人のドイツ国内就労者は、90,000人 (うちフラマン人2,500人) へと減少した。後

<sup>8</sup> 他方、宣誓を拒否した60人ほどの兵士が抑留され、前司令官ヴィンケルマン将軍 (Hendrik G.Winkelmann) は逮捕・収監され、抵抗運動に身を投じたヴェスターフェルト中将 (Johan H. Westerveld) は1941年4月3日に71人のレジスタンスと共に処刑された (Overmans, a.a.O., S. 773)。

<sup>9</sup> C.S.Weisser, Erinnerung, Verantwortung und Zukunft. Eine Betrachtung der NS-Zwangsarbeiter-Entschädigungsverhandlungen unter Berücksichtigung der rechtlichen und außenpolitischen Faktoren, Berlin 2004, S. 32.

<sup>10</sup> Friedrich Christian Christiansen (1879-1972) は、1940~45年の全占領期間にわたりオランダ駐留ドイツ軍司令官を務めたシュレースヴィヒ=ホルシュタイン出身の空軍軍人。戦後1944年末に約22,000人の餓死者を出したなどの苛烈な占領統治の責任を問われ、有罪判決を受けたが、1951年2月に釈放された。

<sup>11</sup> Overmans, a.a.O., S. 774.

<sup>12</sup> Ebenda, S. 775.

<sup>13</sup> Alexander von Falkenhausen (1878-1966) は、戦前著名なゼークト将軍の後任として蒋介石率いる国民党軍の軍事顧問を務めた (1934-39年) 後、帰国。後に1944年7月20日事件に関与し、ダーハウ強制収容所に収監され、処刑寸前で米軍により救出されるという数奇な運命を辿った。戦後25,000人のユダヤ系ベルギー人を移送した事で12年の刑を宣告されたが、3週間で釈放された (R. Wistrich, Wer war wer im Dritten Reich, München 1983, S. 69)。



に終戦間際の時点で、70,000人のベルギー人がドイツ国内で就労しており、その間に死亡したのは1,135人(2～2.5%)であったとされている<sup>14</sup>。

## 6. ユーゴスラヴィア

1941年3月25日日独伊三国同盟に加盟した国王ペータル2世の率いるユーゴスラヴィア王国政府に反発した軍部が翌3月26日クーデタを起こし、親独政権は呆気なく崩壊した。これを目の当たりにしたヒトラーは、ただちに同国の占領を決意。同年4月6日独伊ハンガリー、ブルガリア等の同盟国軍と共にユーゴへ侵攻。同国は、4月17日に降伏した。数日のうちに約700,000人のユーゴ兵の半数が抑留された。先のクーデタの勃発もあり、ユーゴスラヴィアに対して、ヒトラーは好感を抱いていなかった。すなわち、(国王を失脚させた)ユーゴ政権はセルビアの影響下にあると見做していたのである<sup>15</sup>。そこで、同年7月8日を以てユーゴスラヴィアなる国家の消滅を宣言した<sup>16</sup>。

1941年5月4日のヒトラーの帝国議会演説によれば、6,298人のセルビア人将校と337,864人の下士官が(釈放の見込み無く)抑留されたという。加うるに、抑留された650人のユダヤ系ユーゴ人が収容中に非人道的処遇を受けたことは言うまでもない。

## 7. ギリシア

1941年4月6日ヴァイルヘルム・リスト元帥麾下のドイツ第12軍は、それまで駐留していたブルガリアからギリシアに侵攻した。同国を占領することは、既に1930年代から既定路線であり、1936年開催のベルリン・オリンピックの聖火リレーがその為の下見の意味合いを持っていたことはよく知られている。ドイツ軍侵攻開始後2週間ほどでほぼ戦況は定まり、ギリシア駐留の英軍(62,500人)はダンケルク撤退作戦の際と同様に重装備の大半を遺棄して4月22日以降クレタ島経由で50,000人が海路脱出する。クレタ島(英軍守備隊は27,000人)は、5月末まで持ち堪えたが、5月28－9日のアレクサンドリア(エジプト)への撤退作戦を経て、6月11日に至りクルト・シュトゥデント少将麾下の降下猟兵を主体とする第11航空軍団により制圧された。ユーゴスラヴィア及びギリシアの平定に約2か月もの時日を要したことは、後の戦局に大きな影を落とすこととなった。

## 8. 英国及び米国

ダンケルクなどの英国本土に面したフランス国内より多数の英軍兵士が母国への生還に成功したが、ドイツ軍の捕虜となった者も少なからず居た。他方、米国は、中華民国を支援する為に「義勇兵」(「フライング・タイガーズ」)を派遣するなど、日本との戦闘行為を既に事実上行っていたが、国内で反戦世論が優位を占めていたが故にドイツとの戦闘行為を実行するまでには至っていなかった。日本の「真珠湾攻撃」直後に軽拳ともいえる対米宣戦布告をドイツが行い(同年

<sup>14</sup> Overmans, a.a.O., S.776ff.

<sup>15</sup> Ebd., S.780.

<sup>16</sup> 既にクロアチアは、1941年4月15日に独立を宣言し、ドイツの承認を得ていた。クロアチア人、ドイツ系住民、マケドニア人は、ユーゴ軍の半数を占めていたが、最良の処遇を享受したという(ebenda)。

6月のドイツのソ連侵攻に際して、日本は対ソ参戦に踏み切ることとはしなかった)、アメリカの欧州戦線への参入が可能になり、チャーチルの念願が実現されることとなった。

米軍は、リビアにあったエルヴィン・ロンメル元帥麾下のドイツ・アフリカ軍団(Deutsche Afrikakorps)を更に圧迫すべく、1942年11月8日英軍と共にアフリカ大陸北西岸への上陸作戦を決行した(「トーチ作戦」)。このように米軍の対独参戦は遅れたので、ドイツの捕虜になる米軍兵士は少数にとどまった。その後独本土空襲が熾烈さを増してゆくと、ヒトラーはとりわけドレスデン大空襲(1945年2月13/14日)後撃墜されて捕虜になった連合軍兵士を全員射殺するよう要求し、更に毎日5000人の捕虜をベルリンのヴィルヘルム・プラッツに整列させ、人間の盾としたが連合軍の空襲が和らぐことはなかった<sup>17</sup>。

## 9. ソ連

1941年6月22日ドイツのソ連侵攻という不意打ちを食らった結果、夥しい数のソ連軍兵士が捕虜となった。加えて、民間人のドイツ国内への移送が度々実施された。人種理論(劣等人種の淘汰)とイデオロギー(反ボリシェヴィズム)を背景とした「絶滅戦」という戦争の際立った性格付けから、ソ連兵や民間人に対する処遇はユダヤ人に対するそれに次ぐ過酷なものとなった。

## 10. イタリア

ムッソリーニ政権が倒れ、1943年9月8日イタリアがドイツと敵対するようになった後に発生したイタリア人捕虜は、ソ連民間人を上回る死亡率を示している。これは、給養水準の格差に由来するものである。連合国側に寝返ったイタリア軍(実はそのうちの多数派はムッソリーニ及びドイツ側に立って戦闘を継続したものの、)をドイツは容赦しなかったのである。他方、イタリア人捕虜を収容する為に、それ以外の捕虜(約52,000人)はドイツへと移送された<sup>18</sup>。

## 四、外国人労働者の一般的状況

表1を見ると、1944年夏の時点でドイツ国内に就労中の外国人労働者の内訳は、捕虜が総数193万人なのに、民間人の労働配置は総数598万人と3倍以上を数えている。男女比は、男:女=1:2(66.7%:33.3%)となっていた。中でもスイスは表面的には中立国としての立場を堅持していたので、男女合計2万人弱のドイツ国内就労者は、自由応募労働者であったと考えられる。また、ドイツの同盟国ハンガリー王国(国王不在)は、最高権力者(摂政)ミクローシュ・ホルティ提督(Miklos Horthy, 1868-1957)<sup>19</sup>が独ソ戦の戦局悪化を背景として1944年3月に事実上失

<sup>17</sup> Overmans, a.a.O, S.797.

<sup>18</sup> Ebebdä.

<sup>19</sup> 1917年第一次世界大戦後期にイタリア海軍を相手に優勢に戦いアドリア海の制海権を保ち、翌年海軍総司令官となる。同年海軍水兵の反乱を鎮圧し、反革命を名分としてハンガリーを占領した(ベラ・クン革命政権は崩壊)ルーマニア王国軍を撤退させるなどの功績により国民の圧倒的な支持を受け、翌年3月1日摂政となる。第一次世界大戦終結以前はオーストリア皇帝がハンガリー国王を兼ねる同君連合であったが、敗戦によりカール1世(在位1916-8年=ハンガリー国王としてはカーロイ4世)が1918年11月12日退位した後は君主不在となった為、摂政が枢軸軍の敗色が濃厚になるまで(1944年



脚したもの、ソ連軍が同国を占領するまで枢軸国側にとどまっている。同じくブルガリア王国（1941年枢軸国となる）も、1944年ソ連軍によって占領されるまではドイツの同盟国であった。其余の国々は、いずれもドイツによって軍事占領された国々である。

表2 国籍別に見たドイツ国内に於ける外国人労働者(民間人及び捕虜)数(1944年8/9月現在)

国籍	捕虜	民間人			総計
		男子	女子	合計	
ベルギー	50,386	170,058	29,379	199,437	249,823
バルト三国		28,450	16,349	44,799	44,799
ブルガリア		14,207	2,050	16,257	16,257
デンマーク		12,179	3,791	15,970	15,970
イギリス	80,725				80,725
フランス	599,967	603,767	42,654	646,421	1,246,388
ギリシア		12,532	3,126	15,658	15,658
イタリア	427,238	265,030	22,317	287,347	714,685
ユーゴスラヴィア	89,359	72,263	23,497	97,760	187,119
オランダ		233,591	20,953	254,544	254,544
ポーランド	28,316	1,088,540	573,796	1,662,336	1,690,642
チェコスロヴァキア		252,825	61,065	313,890	313,890
スイス		11,835	5,179	17,014	17,014
ソ連	631,559	1,062,507	1,112,137	2,174,644	2,806,203
ハンガリー		17,206	7,057	24,263	24,263
総計	1,930,087	3,986,308	1,990,367	5,976,673	7,906,760

出所 U. Herbert(Hrsg.), Europa und der “Reichseinsatz”, Essen 1991, S. 8.

これを業種別に見ると、次表の如くなる。

表3 業種別・国籍別に見た外国人労働者の配置状況(1944年8/9月)

業種 国籍	農業	鉱山業	金属工業	化学工業	建設業	運輸・ 交通業	其他	合計
ベルギー 合計	28,652	5,146	95,872	14,029	20,906	12,576	78,467	253,648
民間人	3,948	2,787	86,441	13,533	19,349	11,585	65,619	203,262
捕虜	24,704	2,629	9,431	496	1,557	991	10,578	50,386
構成比 (%)	11.2	2.0	37.8	5.5	8.2	4.9	30.4	100.0
フランス 合計	405,897	21,844	370,766	48,319	59,440	48,700	299,783	1,254,749
民間人	54,590	7,780	292,800	39,417	36,237	34,905	189,053	654,782
捕虜	351,307	14,064	77,966	8,902	23,203	13,795	110,730	599,967
構成比 (%)	32.3	1.7	29.5	3.9	4.7	3.9	24.0	100.0

3月事実上失脚し、同年10月17日辞職）四半世紀にわたってハンガリーの国政を指導した。第二次世界大戦後枢軸国指導者であったにも拘わらず戦犯指名を免れ、亡命先のポルトガル（アントニオ・サラザール政権下）で死去。

第二次世界大戦末期ドイツの 外国人労働動員政策1944/45

業種 国籍	農業	鉱山業	金属工業	化学工業	建設業	運輸・ 交通業	其他	合計
イタリア 合計	45,288	50,325	221,304	35,276	80,814	35,319	117,011	585,337
民間人	15,372	6,641	41,316	10,791	35,271	5,507	43,201	158,099
捕虜	29,916	43,684	179,988	24,485	45,543	29,812	73,810	427,238
構成比 (%)	7.7	8.6	37.8	6.0	13.8	6.0	20.1	100.0
オランダ 合計								
民間人	22,092	4,745	87,482	9,658	32,025	18,356	95,946	270,304
捕虜								
構成比 (%)	8.2	1.8	32.4	3.5	11.9	6.8	35.4	100.0
ソ連 合計	862,062	252,848	883,419	92,952	110,289	205,325	351,417	2,758,312
民間人	723,646	92,950	752,714	84,974	77,991	158,024	236,454	2,126,753
捕虜	138,416	159,898	130,705	7,978	32,298	47,301	253,379	631,559
構成比 (%)	28.5	8.3	29.2	3.7	3.6	6.8	19.9	100.0
ポーランド 合計	1,125,632	55,672	130,905	23,871	68,428	35,746	267,739	1,688,080
民間人	1,105,719	55,005	128,556	22,911	67,601	35,484	244,488	1,659,764
捕虜	19,913	667	2,349	960	827	262	4,005	28,316
構成比 (%)	66.7	3.3	7.5	1.4	4.1	2.1	14.9	100.0
保護領 合計								
民間人	10,289	13,413	80,349	10,192	44,870	18,566	102,594	280,273
捕虜								
構成比 (%)	3.7	4.8	28.7	3.6	16.0	6.6	36.6	100.0
総計 合計	2,747,238	433,790	1,691,329	252,068	478,057	378,027	1,635,461	7,615,970
民間人	2,061,066	196,782	1,397,920	206,741	349,079	277,579	1,232,716	5,721,883
捕虜	686,172	237,008	293,409	45,327	128,978	100,448	438,745	1,930,087
構成比 (%)	36.1	5.7	22.2	3.3	6.3	5.0	21.4	100.0

出所 Herbert, Fremdarbeiter, S.315. 一部補正.

1944年夏に起こったヒトラー暗殺未遂事件直後のドイツ国内に就労していた外国人労働者は、およそ790万人であったが、出身国別の内訳を見ると、ソ連から移送された捕虜及び民間人の数が3分の1 (35.5%)を占めており、次いでポーランド出身者(21.4%)とフランス出身者(15.8%)が多い。これら3カ国で約73%を占めている。また業種別に見ると、農業に275万人、鉱山業に43万人、金属工業に169万人、化学工業に25万人、建設業に478万人、運輸・交通業に38万人の外国人労働者が配置されていた。農業は食糧生産を担い、鉱山業及び金属工業は兵器生産の礎として不可欠である。更に、化学工業も、戦争遂行には不可欠である。運輸・交通業は、人員・物資の移動の礎である。就労に際して危険度の高い鉱山業に配置された人数が多いのはソ連人、ポーランド人、イタリア人の順であり、(ドイツから見て)敵性度の高い順になっている。ベルギー人、フランス人、オランダ人は処遇面で概ね優遇されていたと考えられる。逆に「劣等人種」と見做されていたスラヴ系の外国人(とりわけソ連、ポーランド出身者)は、劣悪な労働環境下に置かれた。

表4 ドイツ人労働者と比較した在独外国人労働者の死亡率 1938-45年

民間人	死亡率(%)	捕虜	死亡率(%)
ドイツ人(20-39歳,1938年)	0.4	ベルギー人	0.6
オランダ人	1	イギリス人	0.8
デンマーク人	0.4	フランス人	0.8
イタリア人(1938-42年)	0.3	イタリア人(1943年以降)	4
ソ連人(東方労働者)	3	ソ連人	25

出所 H.-C.Seidel, K.Tenfelde(Hrsg.), Zwangsarbeit im Europa des 20. Jahrhunderts, Essen 2007, S.215. 一部改変。

## 五、むすび

以上に見てきたように、ドイツの外国人労働者処遇に於いては、ヒトラー以下ナチ党が持つ独特の人種観に由来する差別と、ドイツとの国家関係に由来する距離感に根差す差別とが混在しており、一様な処遇は端から期待できなかったと言えよう。戦時中のドイツに於いて就労していた外国人労働者は(a)捕虜<sup>20</sup>と(b)民間人に大別出るが、更に(1)欧州大戦初期「出稼ぎ労働者」扱いされていた西欧諸国出身者、(2)戦況悪化に伴い強制労働へ転換された西欧出身者、(3)ポーランド、ソ連出身者などの「東方労働者(Ostarbeiter<sup>21</sup>)」、(4)強制収容所(KZ)に於ける強制労働者、(5)ユダヤ人強制労働者の5つの類型が見られる<sup>22</sup>。中でもユダヤ人を絶滅すべき人種とするナチ党のイデオロギーが、ロシア人などのスラヴ人に比してどれ程苛烈な処遇をもたらしたかは、両者の比較の上で改めて吟味されなければならない。

<sup>20</sup> 例えば、G. Bischof, S.Karner, B.Stelzl-Marx(Hrsg.), Kriegsgefangene des Zweiten Weltkrieges, Wien 2005 は、第二次世界大戦中の各国捕虜の処遇について、多角的に分析したものである。

<sup>21</sup> 1942年1月20日の悪名高き「ヴァンゼー会議(Wannseekonferenz)」の1か月後、2月20日付のヒムラーの所謂「東方労働者布告(Ostarbeitererlasse)」は、200万人を上回る東方労働者の強制労働の核心的部分をなすものであるが、その検討は別稿に譲る。Vgl.Herbert, a.a.O., S.178ff.

<sup>22</sup> Weisser, a.a.O., S.32ff.